

インドの大乗仏教のなかに唯識学派というものがでてきて、このなかで、アラヤ識という、人間が知覚しえない意識を体の中にもっており、それが自分の肉体や宇宙のすべてをつくりだしたのだ、という理論体系をつくるにいたったわけです。このアラヤというところに、我々の五官を通じてきた情報が、無意識となって記録される。この記録が、種となって熟してゆく。あたかも植物のように、大きくなって、それから外界に出て、体験するというようなことが書いてあっなんです。これを読んだ時、あっ、これだなと思ったんです。今日でいう、フロイトが発見した潜在意識と、このアラヤ識がダブってくるんですね。

「因」と「果」とアラヤ識

人間のくり返された想念は、深層意識であるアラヤに入っていく、そこにその想念が刻因されると、やがて未来において実際にそれを体験する。そして、人間のくり返された想念は、たとえそれが当人の欲するものであれ、また恐れるものであれ、無差別にアラヤは受け入れてしまい、そして受け入れでしまったが最後、アラヤはそれを未来に必ず実現してしまうのです。このアラヤ識というものをコンピュータのように考えるとわかりやすいかもしれませんが、今、人間か頭で何か考える。そして、考えたものが全部アラヤにインプットされるんじゃない。ここが大事なところですよ。アラヤに入るには前提条件があるんです。感情をともしなわなきや駄目なんです。考えること、つまり思考というものに感情というものが加わって熱をもつと「念」というものになるんです。このようにアラヤ識というコンピュータにインプットされたものを、仏教用語では「異熟」といっています。先祖伝来の「異熟」、自分の両親から受けついで性格というものの、自分の体験、先生から教わったこと、何か失敗して、こういうことはやるものじゃない……自ら悟ったこと、すべての「異熟」がドロドロとした液状になって、我々の深層意識の奥底にあるアラヤというコンピュータに充満しているわけです。

因果は同類にしたがう

人間が、「日常に感情をともしたって思うこと」というのは、何も望ましいことや、やりたいことばかりとは限らない。時には、人間はくよくよと、いろいろな心配ごとや悩みごと、「そうあって欲しくないこと」を感情をこめて考えています。いや、むしろ、この心配ごとのほうが、普通の生活では圧倒的に多いといえましょう。すなわち、アラヤに、「恐れて起こってはほしくないもの」が入っちゃうと、アラヤはそれをも未来に実現してしまうのです。

アラヤ識三縁起

アラヤに入るのは意識なのですが、それがストレートに入るわけではありません。

こんな想像をしてみてください。あなたの心の奥底にあるアラヤの入り口に一枚のカラー・スライドが置かれていて、送られてきたあなたの思いがアラヤに入ろうとする際、このスライドを通過しなければならない。思いを、凝縮されたひと筋の光線と考えてください。ところで、このスライドに使用される色は二つあって、一つはバラ色、他の一つをグレーとします。バラ色は希望であり、肯定を表します。一方、グレーは恐れであり、否定を表します。つまり、このスライドの色はあなたの日常の感情を表しているのです。

さて、ここで、あなたは何かを願います。願いは希望であり、それが達せられたときに喜びをもたらすものですから、この思いの光線はバラ色です。このバラ色の光線がアラヤに送り込まれようとするときに、入り口にあるスライドがグレーであったらどうでしょう。

光線のバラ色は、スライドのグレーと混じり合って濁ってしまい、希望の思いはそこでストップしてしまいます。つまり、バラ色の願いは、バラ色のスライドのみを通過してアラヤに大ることができるのです。逆もまた同じです。実に多くの人が、成功、発展を願いながらもその希望を達成できないのは、スライドがグレーだからです。つまり、日常の感情がグレーで、そのためにスライドがグレーに染まっているからなのです。

私は今、大生でもっとも大切な点に触れています。

この日常の感情の持た方が、人失の幸、不幸を左右するのです。いかに願いをくり返し、思いを力強くアラヤに送るうとも、この入ライドの色が同調しないかぎりインプットは行われず、したがって因が、やがて来るべき日の結果、すなわら果と結びつく縁が生じないわけです。次に、アラヤ内に入った因＝タネは、それまでに受け入れ、蓄えられていたもろもろの因の集合体＝異熟の中に突入し、そこでドロドロと混ぜ合わされながら、しだいに一つの像を結んでいきます。この像を結んだ状態を「第二縁起」と呼びます。ここで注意していただきたいのは、因がアラヤに入って混ぜ合わされ、溶解していく過程で、因にともなっていた人称名詞が失われていくということです。「私、彼、あなた」という人称を大い、形容詞のみが残るという性質があるのです。「おいしい、まずい」「きれい、汚い」「うれしい、悲しい」これだけが残る。たとえば、今、自分にライバルがいて、そのライバルが失敗すればいいと願っているとします。この願いが、アラヤに入ると、「あいつ」という人称が消えて、相手をねたむ感情だけが残る。このとき、ライバルも人の不幸を喜ぶような人物であれば、つまりグレーな感情の持ち主であれば、このマイナスの願いも効きます。ところが、ライバルが寛容で陽気な人物だったら、ライバルのアラヤに憎いという因が入ることができず、自分の持っている憎いという感情は自分にはね返ってくる。憎いというのはグレーな感情で自分のカラー・スライドはズレ一色になっており、入った因は行き場がないから自分に影響するわけです。

あなたの心を一本のビンとします。このビンの中には、否定という液体がいっぱいに入っています。この否定というのは、「できない、ダメ」などの考え、または気分です。

さて、このビンの中へ希望の小石を日夜投げ込むのです。希望の小石とは、肯定の小石であり、「できる、大丈夫、安心」という考え方です。毎日毎時、飽きることなくこの小石を投げ入れますと、やがて小石がビンの中にたまり、否定の液体はビンの口から流れ出していきます。初めは、小石は否定の液体の底に沈んでしまい、何の効果も見られません。しかし、やがてこれらの希望の小石が積み重なってそれまでの液体を押し出し、明るく軽くなった心のスクリーンに、願いのイメージを徐々に描き出します。最初はうっすらとしたクロッキーから、やがてははっきりしたデッサンに、そして彩色がほどこされ、あざやかな実物そっくりの絵が現れるのです。そして、その絵の完成がアラヤの中においてなされれば、後はその絵が実物となって現実に躍り出てきて、私たちはそれを体験することになります。

